

推しに会ったら地獄でした

内容

推しに会ったら地獄でした	1
第一話：最悪で最高の出会い	1

第一話：最悪で最高の出会い

春の夜は、どうしてこんなに優しいんだろう。

街灯に照らされた帰り道、私はコンビニの袋を揺らしながら、小さくため息をついた。

「……また再生数、伸びてないなあ」

スマホの画面には、自分の歌動画。

いいねはそこそこ。でも、“バズる”には程遠い。

私は、星川りの。

——三十一歳。

……なのに。

「小学生にしか見えないって、どういうこと……」

ガラスに映る自分は、どう見ても子どもだった。

身長 151 センチ。細い体。

そして——

半分だけ金髪の前髪と、襟足。

「……変な髪型のまま、もう三十超えてるし」

苦笑いする。

でも、これが“私”だった。

帰宅してすぐ、私はいつものように配信を始めた。

タイトルは——

《夜の即興うた》

ギターを軽く鳴らして、深呼吸。

「こんばんは、りのです」

コメントがぽつぽつ流れる。

《今日もきた》

《声好き》

《癒し》

少しだけ、心が軽くなる。

そして私は歌い始めた。
——それは、恋の歌だった。
誰にも届かないと思っている、
それでも歌わずにいられない気持ち。
そのとき。
《え、この曲やば》
《誰これ》
《プロ？》
見慣れないコメントが一気に増えた。
「……？」
不思議に思いながら歌い切る。
配信終了後、通知が止まらなかった。
「え、なにこれ……」
DM が来ていた。
差出人：Harmonia 公式
「……え？」
手が震える。
ハーモニア。
今、一番売れているバンド。
私の“推し”。
「……嘘でしょ」
恐る恐る開く。
『あなたの声に惹かれました。
一度、お話しできませんか？』
「無理無理無理無理無理！！！！」
思わず叫んだ。
推しから、連絡。
人生終了のお知らせ。
いや違う、開始かもしれないけど、無理。
「いやいやいや、絶対ドッキリでしょ……」
でも、公式マークは本物。
「……どうしよう」
五分悩んで、
三十秒で返信した。
『ぜひお願いします』
「即答してるじゃん私！！！！」

数日後。

私は、約束のスタジオ前に立っていた。

「帰りたい……」

心臓がうるさい。

逃げたい。

でも会いたい。

「……いや、推しに会えるんだよ？人生最大イベントでしょ」

自分を励まし、扉に手をかけた。

——その瞬間。

ガチャッ

中から人が出てきた。

ぶつかる。

「うわっ」

「すみません！」

顔を上げた瞬間、

時間が止まった。

そこにいたのは。

私が、ずっと画面越しに見ていた人。

ハーモニアのボーカル。

那加森 廣樹。

「……え？」

彼が、私を見る。

数秒の沈黙。

そして——

「……え、子ども？」

「三十一歳です！！！！」

反射的に叫んだ。

「……は？」

「ほんとです！！身分証あります！！！」

「いやそういう問題じゃなくて……」

彼は困惑した顔で、私を見下ろした。

「……君が、りの？」

「はい……」

「……嘘だろ」

「ひどくないですか！？」

沈黙。

そして、彼はふっと笑った。

「……面白いな」

「え？」

「想像と全然違う」

「それ褒めてます？」

「いや、褒めてる」

少しだけ、優しい声だった。

「でもさ」

彼が近づく。

距離が近い。

近すぎる。

「歌ってるときの声と、同一人物に見えない」

「……よく言われます」

「なんかズルいな」

「ズルい？」

「ギャップで人殺せるタイプ」

「殺しません！！」

気づけば、笑っていた。

さっきまで震えてたのに。

「……じゃあさ」

彼が言う。

「一緒に曲、作ってみる？」

「……え？」

「面白そうだから」

その瞬間。

私の世界が、少しだけ変わった。

(推しに会ったら)

(地獄でした)

(でも——)

(たぶん、最高の地獄)